



野槌
上二

曾4
775
227



林羅山先生著

野槌

此書之集乃法原流之草之注釋
与極念也

有客謂曰凡穢物語草子以行
于世者多出自婦人女子之手故
有啾唧嚙呢之語無教誨訓誡
之法唯見冶容粉粧之態未聞
丈夫雄豪之風且或煩諸繁冗
失諸嘈雜或流於鄙俗淫於虛
誕徃々皆然獨有紀氏古今倭歌



集序及土佐日記而已此与婦人
兒女之口誠異日之談也繼紀
氏而後作者雖不遠然其唯兼好
耶一曰俞余時偶見徒然艸
於是乎取其言以書之

羅山子

人乃心誠を縁^ユてよ海川のこころを
こをれるるるふここれたらのたあしき
事一なり五のさるはりのたあを人の心
をれはう忠於ふるこあはめがひひん
ことりりなりきまうまればは物いづれ
こは心をしん佛もはは縁よりぞとるに
うりていひをたて来やあやあやかり
なり凡^{オカニツ}本^キ草^{クサ}は名をうりていひをさるる
こころこは縁をうりて其心とまはこあたるを
めそいふれそのまはくおひはああか
ふれはたはうもありたりもあり
これが由はひひのあをくあはるこ

道うねらうららにぬくもたにふるくおふおふ
 おねさきゆいまうひてよあうぬいぬい
 かりぬじりーちりやある神せよあやの
 ひめと乃ばらうもつくまおらひひつれ
 くちりーてのつらまばらひのるる川
 のらうぬせのちれ物よあめあめいあな
 ふふの本よりあまはねりーあうらあき
 ゆいかりぬい

かたあのせりれくろ秋夕影のらまらとて
 露とらうとそ筆とらくは侍分

ト部系圖



大正二年一月廿日
 中村猶雄氏贈

大織冠 鎌足 意美 磨 清磨 諸魚 智治 磨

日良磨 豐宗 好真 兼延 兼忠 兼親

兼政 兼俊 兼康 兼貞 兼茂

慈遍 大僧正 南朝詔
 兼雄 民部左輔 從五上

兼好 藏入 左兵衛佐 以俗名為法名

兼藤 兼益 兼夏 兼豐 兼照 兼敦
 兼直 兼富 兼名 兼俱 兼致 兼滿 兼右

右京大夫

兼名 兼頭

兼見

風雅集十七世紙乃がれて本曾路と云
此と云傳りと云 兼好法師

杉りひらるる本を好むと云ぬ浅のみ
うめそやむつよ神の色うは

新千載集十六建武二年内裏千首
歌の題を流りりて決てもりけると云
春植物と云は海と云紙

久うくは雲升乃るるにいつける日影
ひらりけは海ふ屋戸ゆるううれ

同十八雜歌下

去めこまたうき世のりたりよ赤あうら
思ひしきくは山ゆももりぬ

同十九 兼好法師が母方ゆりりる
一めぐるは法事の目けげ物よる魚
こり洋うりりる

前大納言為定

別り秋をわとれくわたりきて
時もあれたらうきあらん
也

のりりあふ秋しういしあかきも終
あふとらうきをりりは

新拾遺集六冬部

あし鴨のけし翅ふらみあしあ
うはむは霜やうらなはるし

同廿九 西新旅部

旅りうういりくれく結出と
山はらうは月をうりん

同廿一 恋久恋

恋をうみくくたにたもう那
ふりやわはう人もうき

新後拾遺集八 炭電を

すみゆと年ろきじまにあうき恋
くふりや松のつらまなうん

同廿九 離別部

那はりふ葉はうらうの愛をふ
たの母さうく山風うき

同十六雑言

ほの世をきりけりぬほころあききり
あけりけよのこきりぬあききり

新續古今集六首をあらわし

手枕の節は昔染の糸くれよ

もきをきりりのうききりひきよ

同十一巻末と

みきひのうこおむののみさほよ

あききり人よあききり

同十二玉津島社ヤシロありけりあり

中一巻新巻と

いふぞん津ありきりりミソギあり

見し巻新もけりぬあききり

同十三巻初巻あり

うぬ人とあききりありあり

あききりありありありあり

同十四巻末と

うききりひきりぬあききり

あききりぬあききりありあり

同十五巻末と

あききりぬあききりありあり

あききりぬあききりありあり

同十六首をあらわし

あり

兼好法師自讃歌二首

うららかなるるの春のさかづきありてうららかなるる
あまのうららかなるるのさかづきありてうららかなるる
伊くもてなほくもてなほくもてなほくもてなほくもて
のさかづきありてうららかなるるのさかづきありて

又兼好法師ありて或人れさるる

世中とわりありて

河波の鳴るる波風もね

高野山金剛三昧院の兼好自筆此

短冊五枚あり是ハ或人夢々南無釋迦

佛全身舍利と云事とてなほあり

より傳へしり時に兼好もよめありと

直義朝臣と跋と云つて其歌云

はるかにさかづきも初春の波風も

さかづきも初春の波風も

香よ匂ひたかくなりさなありて

みのりたるやまははははは

理即より究竟りりりりりりりり

ひらひらひらひらひらひらひらひら

采のさかづきも初春の波風も

さかづきも初春の波風も

武蔵野や雪ありてははははは

まよひのさかづきも初春の波風も

つゝとていへる古田兼好法師が作也
兼好は後醍醐天皇の侍の人なり高
武蔵守師直の侍にして師直の代て
塩冶判官が妻たりて艶書を作さ
たりけるや徹書記が物語も或云
兼好は後宇多院の侍あり
帝崩してありぬと語りて遁世
此時浄弁慶運頼河兼好の四人を
世よ四天王と號せたりけり草紙を
はれくるといふ名はくは事ハ教端
のこもる所のつて号せりありける
草紙は義なり〜又法云と云ふ

前を草葉ともいふ葉もいふなり
 一草紙はくくくく枕草紙源氏物語
 の辨をうつちり兼好の天台の教を
 学びて又莊老の道ともうりか
 見くくく世俗をいさくくり生死を常
 と観くく時節を感く風景をうく
 男女情をいひてむくくありを
 のくくり由くく和語の文章ふれ
 殊くくくありありありあり

清きくくなりやうく日くくく
 ひてんくうつりゆくく事くく
 けりやうくくくくくくく
 ぐくくくく

先きくく席くく六條宮は古撰の伊勢物語の
 真字本は後述くくくく
 閑寂の心をくく
 日くくく
 山形はくくくく富士の言根の雷くく
 ありけり伊勢物語くくく
 たりむきくくく物くくく
 視小むくひて何くくくく

終日於義也

詞花日くくしに

ひよふ人ひつひついひひるるる縁之風雅集フナガシラ
あり

よしをすくく 由来ユライあり事あり

うこほりしをく 沖之月風ニツキの影あり

る時うらうらうらとあく物とあり

うこほりしをく 義あり けうの物語シヨゴトナリ也

いぞやいせふじふれは縁がりうらうらよ事

うらおほるも帝ミカドの位いしとあり

竹の園タケノエの末葉まで人間をさのみとわら

やんごゝあれたの人おほきとゆいありやたふ人

舎人シヤヒナあどゆいばかりとけしとあり

まじしをすくくわきとれいふ縁あり

うれよりあもほくくはハナつをほく時あり

あさうらふるもみづうらうらとあり

いとはか法師ハツシがうらうらとあり

よあし人よとありのうらとあり

よしは細ホソくわきとれとあり

いさうらひまうらふありとあり

よはんくく増賀マツカひとあり

名ナづかふしとあり佛ハツはあり

おがゆりしとありゆりせとあり

あしあうらうらありとあり

あしあうらうらありとあり

物ららひの心はあてはななくは愛敬ありて
洞あぬうぬこうあふはむはありて
あしとらるる人おほりせりゆ^ハ本性
らんこそはおいりてあれらるるこそ
生きほふいしめんをまむり^ハ賢よと賢よも
うつなはうつはらるるかこらひつゆ^ハ人
けいふく成ぬれはれらるる教めくさげむ
人よもまきしらしてうなぞを紙のりくさう不
いま記りてあられありなき事ハまこと
文は道作文和^ハ管^ハ絃^ハのたまこ有^ハ職^ハよ公
事^ハのさく人^ハの統^ハるらんそいみじかりて
手あてはななくはけりてあられなかり

くて拍子うりついでさうを物りてあて
むねもそのこのいよきれ

いごやの教浩詞也

いごやの教浩詞也 ^{モトモ}最なるありて可

畏とてた傳も日本紀あもかこいよあり

竹は園生 竹園ハ親ととと王子^ハ皇孫^ハの

末葉までと云義あり園生は生ハ達^ハ生^ハ浅草

生ハ類ハて生植^ハの意あり古文苑^ハハ枝葉^ハが作

とて梁王^ハ兎園^ハ賦^ハハ脩竹^ハ檀^ハ欒^ハ夾^ハ池^ハ水^ハやあ

と史記^ハ世家^ハハ梁^ハ孝王^ハハ漢文帝^ハハ子なり

景帝^ハの兄^ハなり方^ハ音^ハ餘^ハ里^ハ苑^ハと築^ハあり

宮室^ハと作^ハり^ハ複道^ハと作りて平^ハ臺^ハにつ^ハける

事二十餘里西京雜記孝王此苑
落椽岩栖龍岫鴈池鶴洲果樹
あやしき鳥獸多あり餘多の宮觀相連
まり時人召つけり梁孝王の竹園
又脩竹苑名つゝ朗詠此花是非人間
種再養平臺一片霞此花是非人間種瓊
樹枝頭第二花ありも皆親王の事
あり杜子美哀王孫詩高帝子孫尽隆準
龍種自与常人殊
やむとあり源氏桐壺やんとれま
さかんはあゆぬ花鳥餘情やん
こころにさきこめて上臈はるか

無上あり
一人柄政関日とれ職原鈔執柄
必蒙一座之宣旨故稱一人
けりあり 清文の義あり
たぐ人 毛詩小雅直也人
あはれた人とは柄関の介の人とれをり
舎人ありとれり 清の舎人の後力也毛詩
本府ありとれりふゆとれとありてはり
あり小治ありあり及りありあり
ありありありありありあり
放埒あり
古今ありありありありあり

際をいづくなりとておぼく

放棄テウの意なり

を油のめりやゆい義也 古今よ

秋の節よりゆり終るる女メ節ノ花ハあれ

りしゆゆい花も一時

うれよりあつとて 五位六位女と入

受領シユ等トウの類なり

あつとてが やらうとて花ハ也

法師ホウシなり

本ホはけりコト楸コウ木キ也或木キ新シン也

古今に本ホもあつとす茶チヤにもあつとす竹チク此

よのうとては致シ力リキにありぬゆいあり

清セイ少ショ納ノウ言ゴンがかける 法ホウ少ショ納ノウをケ花ハ弟テイ紙シ小

柄ヘのいじふと法師ホウシなり

花ハはたれとて本ホはけりコトのやうに思オモひヒとる

こそいといふかたれゆいコトのゆいコトを

うちくひといわらコトをいふコトの物モノはけりコトを

女メのまをコトをいふコトのまをコトをいふコトに

しコトのまをコトをいふコトのまをコトをいふコトに

まいてコトをいふコトのまをコトをいふコトに

法ホウ少ショ納ノウをケ肥ヘ後ゴ守シュ法ホウ元ゲン神シンが女メ一イチ條ジョウ後ゴの

守シュ法ホウ元ゲン神シンが女メ一イチ條ジョウ後ゴの

いさむコトひヒまマうウにニけケるルと 時トキもあアひヒて

威イ勢セイあるルなりリまマうウにニけケるルと 極キョクのコトもあアひヒて

旬此字也

増賀入ひり

和別名武峯此僧也

撰集鈔一云むり増賀船人とりふ人酒

うかりりりいけかありけりるる心あ

くて天台山の根本中堂より千夜このりて

これと祈けひされも和実たんやつよう

てゆりらん成時をむ日り伊勢を神宮ふ

まうそく祈撰あけひりり夢はんを

あやう道心とたさんとりも我力を

あふかありひりり示現とうありけひ

りらうち習ておがそやう名利とそてよ

わうゆきりり推よとて身終りりり

小神取これ乞食のふぬふれて一意なる

物成をふも力うけ終るす祈りるふて

下向あけひりりみる人不思議れ思とあ

て物よねふとそえう海をくめいみど

さうそてやあごいひりり地わみえ侍

れも露んもはるるまゆりけりこきり

乃と物りりひりり四日りりた山のわり

りりりりり意慈僧正の室に入終ひたれ

宰相公忠とゆたうりりりりり同朋も

あり又かほれりりりりりりりりりり

や師道は僧正ひりりりりりりりりり

名利をすて終ふはありゆりぬま

かゝるものふはまひひつゝ
威儀とありて名利と離れ
といふめはひひつゝも名利とまじく
せんはまひひつゝも名利とまじく
のふはまひひつゝも名利とまじく
僧正も門の外よみはひひつゝも
とらりてまじくもはひひつゝも
坊主ははひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ
まじくもはひひつゝも大和國多武峯といふ所へ

与慈惠性聰穎探履紫学綜頭密充遂
止觀而忍利名絶交褐安和上皇勅為供奉
佯狂垢汚勿逃去太皇太后敬事為師而
延宮中便於采女中出麓語又四行去
慈惠任僧正入宮賀謝翼後甚盛賀
帝乾魚為劍乘瘦特牛交先駝之列
諸徒叱而去賀房竟曰僧正之煎
駝去我誰乎聽者笑而伏應和三年
如覺法師勸上疾岑因乞居焉長保
五年六月九日滅年八十七
とよそ人お名をいひてりハカとけり
厚んゝめりり佛光極取ハ形もあ

男もかゝ況名利とや我が一力を暇ら
一佛とて一佛とて河沙世界小
あま細く一髪とて千手千眼と具を双
手と目とをよものも九百九十八の手目
あり小あらうまや叔山無趾が足さうま
ころも足とてさうまのあまはあり
四大假令して又やとれく分散あり
事なりれとゆゑ乃ふあらしむ若きも
ともころとれと忘ゆべしんぞ名と
もとの利と貪じや増賀と人の名聞
ら風顛漢とてあらしむかまはあり
況風顛漢とてあらしむかまはあり

世間法法師の金襴と肩みうけて塵埃
んくせむる物は頼小淋とひらけら
んや
ひらけら 一向とありひらけら
ハ雲出妙にひらけら 一向とあり
よきなり 伊勢物語みまはあり
のかりもひらけら 一向とあり
とねらるる
人まらららありき由の
あひらけら 愛敬とまら
めぞ多しとらるる人な 高き義乘の人を
ひら

本性 生れつゝこの天性あり

これかゝら

湯氏常本ハシキギに引くはきこひのまよひ

こゝろをさしめしむるはこゝろに在り

神をさしめしむるはこゝろに在り

心と云ふはこゝろに在り

心と云ふはこゝろに在り

心と云ふはこゝろに在り

心と云ふは

孟子盡心曰形色天性也惟聖人然後可以

踐形焉云人之形色天性皆天所賦性而有

也

陸象家難說曰昔之聖者其首有若牛

者其形有若蛇者其喙有若鳥者其貌

有若蒙俱者彼皆貌似而心不同焉可謂之

非人耶良有乎舜曼膚頰如渥丹美而

狠者貌則人矣其心則禽獸又惡可謂之

人也然則親貌之是非不若論其心與其

行事之為不失也 事文類聚後集十八

賢カシキより賢カシキも 論語学而篇賢カシキ易カシキ

危イロをカシキ コライ

いふとわいふとわいふと コライ

よ引用あり

いふとわいふと コライ

志礼くさるし 日本紀二十ぬ云大夫位者有
差降シテツタリ

うけぞ 交量タウリヤウのくぬ意也

又此をら 漢志カンシ字官カシモたるありゆこも

と云りことしんをばけてるる

ゆううく 志シ識シとトはハりリとトありトとトありト

りよら河物ふんはて取実クシツをたぐと

ちなる者とのふ禁中キンチュウたることしんもよくし

すく知チまマのノくクにあニあアるル

公事 ねほやけとく漢り禁中キンチュウたる事

とる事ゆつりてく

人たる鏡 唐書魏徵ケイシ太宗テウソウ諫朝ケンテウ嘆曰タンイツ以テ

銅為鏡可正衣冠ドウカニキョウカニシヤウイカウ以テ右ミダヒ為ル鑑ケン可知カニシ興キョウ替カヘ以テ人

為ル鑑ケンのノ得トク失シツ朕テ常トク保ホ此コ三サン鑑ケン内ナイ防ボウ已レ過カ

今魏徵逝一鑑ケン亡ス矣

手なとくつとれはるる

東坡文集云真生マコトナマ行ユクと生ナマ草クサ真マコト如シ立タチ行ユク如シ

行ユク草クサ如シ走ハシ未ダ有ラ味アジ能ク立タチ能ク行ユク而シテ能ク定サズ也

河海物之真マコト乃ハ字ナハ人ヒト在リ衣冠イカウをシとスとス

禊也シヅメ行ユク字ナハありく禊也シヅメ草クサ字ナハ人ヒト在リ走ハシ

まはる禊シヅメあり

げこ 酒サケとのノびビとト大オホ戸トといハひノ戸トあり

名ナと小コ戸トといハ事コト白シラ氏シ文集モノ見ミるルあり

日本ニッポンとてハ上ウヘ戸トとト酒サケ寓オク在リ曲マクなる

度々をきく戸内は徳容おれどされ
けりやうのめいも我もも伊勢物終
けこはうつ^器ものあるも中一に義也
は取あてもいおーかぬやうにこいりや
又いさまーうすりおげこあぬも
いさるあうも興め終して酒どのひ
いふ義もあるやられ痛飲とまうた
志升て多くはむ事あり
世に今方せよ牛もて人のあくとまう
公郷を吏士よらこまありうゆはひは法師
の事まぞいひひひ世にうがはひも
のとあうゆりま事とらふらとあ好が

おれよよまうらうーかたせいも人品と
評しておれよよまうらうよまうらう
ふとあーこまいんらふはははは
意ありおれらう才藝のあう戸海
きま事を男子うらうまうらうらう
義なり

伊しこれひらこお代の政ともわされ
民の慈國うらこなるあくとまうらう
はまきようははくしていみとたのひ
おとれはうらまか人こそうをておひ
しう那らうたま衣冠と馬車にむか

て多にありていふひてもらひの義をともひる
事なりんれと九條の遺滅も傳り喚
泣流乃禁中事ともかきせ給りにもたふ
やけのまうり物々をりたりなり成とて
少とてしうり傳り

いりしは聖の代

史記秦本紀韓子曰堯舜來稼不刮茅茨不
剪斂土墼啜土形
六韜曰帝堯王天下之時金銀珠玉不飾錦練
文綺不衣奇怪珍異不視玩好之器不寶涵伏
之樂不聽宮垣屋室不墜薨楹楹不割茅
茨偏庭不剪

群書治要引六韜曰茅茨之蓋不剪

きとら 清は字也乾震の義あり

こころとれ 取狭なり

おりふともらなく おりひつぎありあり

ふにくうぬ義あり

九條の遺滅 一考あり右丞相師輔

公あり

順徳院 ほうねは才之は皇子や

禁秘鈔一考あり禁中清抄も名づく

お月やけのまうり物 帝王のまうり物也

公の字をお月やせとも清り遊仙窟も

天事とてお月やけとて清り

世に人の者としておれをこつてやうに
おごりをなさるめすいへの賢君と云ふ
て國を憂へ民をうきて用と節せよと
いふはこり肉よん殊勝は事ありと
あり此聖王の御に於て善相公の意
見封事と云ふはに我朝神明此あま
つひはよ侍くはひり昔より國富民ゆを
うめりて風俗うすうすつよろく
ふざらおろそりりて一國の政たうも
一ものこころされど君子國や名はくは
を虚名よあはれ中古法をわく政きび
しくありりてゆくと佛法のけりめて

我朝よつていり事欽明と皇より監饒
して推古と皇よつておれりいりり
をりゆへは君臣士民よつておれり
はくは田園をもちて多くお寺塔を建
立と天平年中よ大寺をもちて大佛を
はくは天下の工を費し又諸國七道に
も國分寺を作ら其費をもちて正統十
分は五有り桓武治宇よ及びて都と長
岡よつては又よ京を經營し大極殿豊
樂院をもちて百ありつてあり
王子姫よの第宅后妃女御の宮館人の
目とわやうに俗よ所謂大内裏と云

有りて一太卜正統乃貴五分三及有り
仁明天皇位よつう務治ひてよる川紛奢
と愛し器物をありきさけみ錦綉を縫
うざり珍ふよよりて農業とさゆいげ女功
をそこねみ其上に酒色歌舞れあうび
古今にまれなりほごりれ府庫をむか
しく賦歛もあげりりき天卜れ費二分
の一なり貞觀年中に應天門大極殿
焼らりしと昭宣公の力を持て期年の乃
一成風の功となすすくしども其費あり
りさす一らの半なるふけそとてふひり
しは十分の一よあらず國の衰弊れ

してあはれなり又思ふなりけしへの納君ハ
儉約をこころむび驕りといゆむ漸濯の
衣蔬粉乃食ほせは法ありすや今王
化おらるれども風俗をくして上中下
よりのばやとて衣服飲食の奢り都鄙乃
るのいめかく日々に行水のながれて
うろくさるるなりあひく其志ありと
トささじ欠歛元をよれせよま王子大臣も
皆そくあはれはくしきねと夏のうさび
とほしあはれきねとよねとあはれ
あつたけしきねとあはれうめ
きねはくはのうさびいゆハ徳月史

寝子がらひ... 夢じ夜を...
こらこらとひらひらしたるれ...
で女々々や... 思ひも...
ほ... ね...

色賦あり

色シヨクノこのま...

文選モンゼンに...

宋玉ソウキヨク

登徒子トウトシ好カウ

ワニヤウ

ゆ... け...
に寂寞セキバツと...
さ... ぬ...
む... け...
無ナシ寶ホウ宋玉ソウキヨク球キウ字シ菴アン玉キヨク侍中シチュウ書令ショウ筵セン席セキ虛キョ靜セイ門メン無ナシ異イ
今俗猶有イマノキナノヨシ三國サンコク當トウ
久言クニコト約ヤク府フ

か... け...
金樓子キンロウシ玉卮ノサカキナクソコ無當カウラフ桂カウ花ハナ

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
け... 南...
け... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

あ... け...
ね... 義...
る... かく...
こ... かく...
あ... さ...
く... さ...

秋くれハ野色にならり〜女節花うつれ此
人うはまを〜うりよ

は辰文このまらぬ人情あり〜下
事あり〜思ふる悪好〜いさね〜末
善〜のよ物を男はま〜つ〜ま物ありと
いひ又子とり〜ぬものゝ物乃ありれぞ
〜ぬ〜の〜るは〜あり事〜り〜を
善好が本意あり〜をゆりされを飲食
男女々人ハ大款存せり〜れ託〜り
謙〜男女は乃ハ飲食よりもゆりて人の
そてが〜れ物あり蘇武ハ胡國〜ありて
十九年まで程難と志の〜志節と令

〜の〜も胡婦とめら〜子と〜ありは
〜歌の〜蘇武も〜ぬ〜事
〜東波が海あれ〜然〜は
男女は道ハ人倫の〜り〜れ〜ぞ
蘇武とひが事〜せむや好文の〜は
孔子の南子〜漢水は女〜事と〜を
恋の〜〜〜
善好がひ〜〜事
あり〜の〜事也〜も
善子と〜〜て父母の貴〜を
〜不孝の〜其〜親
の〜

しんぬいりゆりくまや人をな〜あふま
口もよのれぐ又人とこころそのものも口より
入〜い〜男女い人倫り〜りりりそのれを
す〜い〜海あきこと人倫をみ〜はみよよあ
だの事いさハナツギ不ハナツギ及ハナツギるハナツギ〜とをさる
徳〜い〜孔子の関クワン雎キウ詩をよみて
たの〜めども海ウミきびくやの海ウミひ孟子の太
王の色好む事と海〜といふと天下よ
れ〜いりりり内た〜みのもさく外よ
ひぬ〜夫男もるりり〜とゆめりり

後の世は事〜ん〜し〜れ〜ぞ佛のみら〜
う〜ぬ〜い〜り〜た〜い〜

よきもの明言はありれ難くして所迄の
月とていふやと涙をながしに墓のつづれの
世は人ぞ姓も名もあつてす年とて去茶の
急ぎとて涙とてきりりひあきと
行く路つりもやとて中納言茶は産
けし開きとていひあつてぞとてあつては
生し流るりと心集りて殺され侍りて
衆よりて選集抄より詳略は二本あつり
右は院のときを侍りてせはるやとあり
一本は等三よまじりて播磨は武竹の畧
とありふりて侍りてむらびておこふ尼侍り
りしむらびは侍女とて侍りたるがみめはあ

をいふありとて侍りたるやと醍醐の中
納言頭基に思われ侍りて一とせはるど
りよらん侍女侍りたるがみめはあ
侍りたるやとありてむらびとあり
ては入も侍女侍りたるがみめはあ
侍りたるやとありて中納言乃由はひ
舟よ家とて西園より侍りたるがみめはあ
うかひひとて後をまつとてみち乃園み
よひきはひみてかくあつり侍りたるがみめはあ
うかひひとて侍りたるがみめはあ
ても侍りたるがみめはあ
りてはひひとて侍りたるがみめはあ

わらわらしくして思ひますして侍りたる
あり中納言とて思ひてあめを成くと
あだづれ思ひしりあつたてはたはしく
わくさういさく物言念佛侍りたるが
はわよ平言おとくは生志て来りて
おがむ人おぬく侍りたりま廣りおぬ
とて今のせまて朽しる松の木のとて侍り
しに相おどふしをさあふまじりし床あ
思ひやうきとて侍る人里もたつらうに成
ざうり侍るようなりぬ女のふとてさうく
してあやうげよきまじきはくうひ侍り
はめかてなまはいらかま侍りたると

とてつづき侍り回しあひしはくは
やうおあうび人あふにあつたおあひ人お
まめはあひしづれおあひまひくおあひ
るまていさくおあひとひしおあひ浮世お
しよをてあつらうてふらんおあひおあひ
えして侍り此中納言もいさくおあひの
人よていさくさうり侍り侍りはのまて
侍りはらやうおあひとておあひあだ人の
思ひ強てせと秋風を吹ふらりあひまは
又しつましああんとあうの普薩れあまは
てしうらああああああああああああ
とれくあああああああああああああ

配所の月つみれくこじ事 配所の流

罪左遷は人のある所あり

配所は心も配所あり遠く河島

うもあつた配所あり貧賤

小ちのみ飢をみる見付あり君

あゆむらばまあるもつらも配

はるりつたあれあ事あれは

かやうも其心をほくもあ

ひが事あつたかよるゆいゆん

飛とらんやけいそと見といづくも

配所ありつたをほせは山人市尔そ

月とてよあり配に罪をこしてけ

カあり月つみれくこじ事 配所の流

罪をくして配所の月とつみれくこじ事

菅右相は事なりひあつた菅相

西府にたつたつて九月十三夜詩曰昔

被栄華簪組縛今為敗滴榮菜囚月元

似鏡を罪風氣か不破慈随見随聞

首棒標北秋撰作我力秋この詩とよあ

海力乃慈あつたを以て友欽文作紀列弱浦

菅神の碑其畧云都府樹る瓦欽を寺

鐘出掛無聊懐不可獲也蓋非意以

て学而然耶非耶當時御赤鳥几と有

耶無邪彼一時此一時雖欲不豫之色も
不うた鳥不うた若非善行の字やと云り
それ富きにも貪賤めも夷狄めを患難
ほもむらふと云りて自得せんと云事
を記し宗りの字あり官相ハ我邦此
鴻儒をりも君臣憂民臣憂ふらんが
不豫の色ありんや榮有は花の河都を
おりの蜀魄の夢に春と云も峨眉山
の月よ秋と云れしみ藍関の雪小馬と
云ふめてんと云ふ涙と催まはやまし
涙羅の波長沙の風飛ありと云らん
とやせじ天忠文人未だ才常教養
在蒿萊元遺山がつるもころりや
菅相顯基のやけんいごらん羨望
は終末は太皇聖明ありと云らん東山の
雨も赤鳥几々たりと云らん
及んば人の海術術の患
難より事なまは富き安楽あり
ものもろろす孤臣藤子乃ん守
危よあり

我もねやじ事るらんはまゝこゝろは
 けらんも子といふものゝこゝろは
 書きたるを政大臣花園大臣みねづ
 絶ん事とゆふひ終り深友大臣も子孫
 ねいぢぬぞよとゆふ末の終るま終り
 き事也とぞ世継の翁れ物終るま
 法を子に遺るまとて終る世終る時
 の終る終かこゝろをまゝ子孫あゝ
 思ふ也とゆりりりりりりりりり

子といふものゝあゝこゝろ 一本み女子といふ

サキ 前中書王ワケの中務兼ワケ的親王ワケ延喜ワケ終る水子也

詩文終書の人也具平親王といはる中書
 五とくありあり

九条の右政大臣伊通也

花園大臣有仁也信之条院孫輔仁
 親王は水子也

水子といふ事とそと曾れ字也子
 孫をいふ勅會も曾れ重也自曾祖至無

窮得稱曾孫

深敵のやととと政大臣良房諡ハ忠仁公ト

也深友の庄れ又清和天皇は外親也

世絶の翁れ物終る大鏡友永為業

法名 齊念といふ人世絶の物終る

文正天皇より一條院まで十四代百七十
五年一帝王大臣等好事を志するよりそ
上をよ深敷の大臣は子乃たりしまらぬを
をり未ゆきりしるやうのそり
聖法を子用明天皇は清子也麻のが
よりよてひまれ終ふはよ麻のの皇子
より又上まとも八年まもり也

平氏聖徳太子傳曆曰太子三回御後勅
墓工曰汝断四路朕意趣有二一者若く
無大行道之煩二者我子孫若く無日
中にお續又曰子孫不續豈云大知孔子
造教之後嗣者若く不孝矣吾若若新迎大聖

弟子豈若孔子小賢弟子也

此際子孫のありとに事ありといふは
莊子が多男子則多懼といふ意なり
うれ道ハ人倫を離れは男女よ好りて父
子あり天子あり則君臣あり兄弟あり
朋友あり世と好くありはる力ありといふよ
のん事を福とひして人倫のたをればに
と聖人のいふめ也いんぞ人と畜
群小同ぞうんや徳を相夷叙何
顔淵子孫あり事をさうば好あはを
不孝とぞ夷何親子も不孝のんや
なむいふ人あり大あり解事あり夷何

顔子のりゝめてすり物ありとぞあつゝ
玉きりりもの命とぞ彼山林寂寞とこ
のじ者ふらゝ私とぞとるゝ子孫をゝん
とぞ人けん乃をひるゝんやかれ佛老
をのみて父子とぞとて夫婦とぞとるゝ
つゝと佛老のりゝゝり子孫をゝんあゝび
はは夏總持經とぞんゆゝゝゝ釋迦の
妻ハ耶輸多羅をり其子と羅睺羅と
いひも妻と瞿夷とゝゝ羅什三藏と妻
子ゆきゝあゝれ佛老の子と段干宗と
いひ宗が苗裔假ハ漢文帝小はくゝり
道士張道陵も又子孫をゝんあゝび如此

かれハ佛老といんぐ人倫をきてはらんや
うれと学ふ若れとあゝんゆてかゝなり
もてぬくゝり聖法を子と名ゝゝり人か
れと浮屠に法溺ゝゝゆゝゝのせは
僧徒とれわが方人ありと依託してそ
れとと記さる若れと後とさるゝゝり
と記事ありといひて釋迦ハ大聖孔子ハ
小賢ありとがゝり祝と君子は取とあゝ
何ゝゝ昌黎の所謂不惟樂之於以而又
筆之於書といひけふもとがゝり
行とれと道は明らゝるゝ誠には
れ小ゝゝや是と左子と子孫ありゝん

事を縁ぐひ終つる事天下古今の法は
けしむとおぼくゆめいふかん大業は
法ハ酒肆娼坊即道場なりといひて
末世の比丘を肉をくひ女色を耽りて
在家の人より異なりてこれを小乘の却て
淨勝なりといふ或人の中これにもあるん
毘曇の維方佛法根本といふもいふなり
て一語又ほははは不孝なりて國
君の内寵おけく士庶人は妻妾をとり
くしきば精氣をばくしやふなり子孫を傳
へりてきたる國家の破れもあり病をう
けてもははううふもありははは人好む

族々天地をわたりてありて我身はつら
りり叙もなりて子孫を連續してをくごり
時を天地の終りてむるはつらひなりぬ
よ陰陽不測を道といふと周易に載
たり誅を天地の間程類はたをり事
如はるれも其過不及を極めたり孔子は
好色といふもの子思く色をばけりて
いひ孟子を妻を私するは不孝といふ
又はあきを三不孝なりて大事をいふ
なり

載るる瓜ハ雲鈔ノ不審一然たり或
吾合の判詞ノありて野名なりと云ぬ
あやむる所ある人と云ふ

又化野ともいへり河海ノ承曆ノ命
嵯峨野をさしてあざとてけりんも
ありきりていり誰ともさす海を
記すをいりて野の東は景と云ふたりる
志々露 續古今西行

鳥部野 性雲集十云天長四年五月
勤操大泣於中京西寺北院在然勿化茶
貳東山鳥部南林麓
其継中老云長保三年皇居東之築

院於子崩十二月廿四日葬鳥戸野
元在釋書釈又豪居洛陽城四條
坊釋迦院治曆二年五月十五日於鳥戸
野祓柴燒身傾都瞻礼嘆嗟
治曆二年 於泉院

顯昭旅述抄之鳥戸山を河彌陀峯や
其より北を鳥邊野といふ

鳥邊山をいふ綱乃もえたるはたうた
くもえん 我うられん 旅述
思ひのりめ 詞苑
もてい綱もをすぬま 因軒院抄
薪つき雷ありてけりて野を

病は林乃の象とすれ 後撰 法橋忠命

分きはる袖乃の象とすれ 王業 俊成

あにあゝ野の象とすれ 山は網とす

はをささゆり付れ くらあゝとす

ひげうふはゆ とす

ひげうふはゆ とす

陽焔 あり

野馬遊絲也 水氣也 杜子美所謂落

花遊絲白日靜是也 シツカナリ

陽焔は弘法乃十喻詩中 詠陽焔喻あり

庄子翼云野馬遊氣也 又云天地間氣如野

夏は蝉乃春秋 とす

て春鶯と春は とす

む 一義あり

庄子逍遥 不知晦朔 輪転不 生 盡土見日則死 輪転不 一云 輪転希

逸イッガに義云於箇大也イッガや亦如日及生於蒼土
暮生見日則死彼他イッガ也イッガ於焉而已安知有
晦朔や蟪蛄寒蟬や春生反死反生秋死不
見四時之全故曰小年イッガ

こゝあり 空抄小事外ありとあり

河海は無越とも閑雅ととありとありと
ありと云義あり閑雅の幽玄は義ありと
見にくき姿をとりとありとありと

のちをうたれり 莊子天地篇多男子則
多懼留則多事壽則多辱是三者非
所貴也徳也

四十イッガ小なりぬほと

海濱子罕年四十五而無聞焉斯亦不足畏
や已陽貨年四十而見西為其次也
ゆふはひい子孫と愛

白氏文集第二秦中吟不致仕七十而致
仕礼法有明文何乃貪榮者斯言如不聞
の於八九十齒墮雙眸昏於竅貪名利夕
陽愛子孫挂冠頽翠綵懸車惜朱輪
金章帶不勝佞倂入君門誰不愛留美誰
不慮君恩年高須藉老在途合退乃乞
休イッガゆくと云 さらぬくと云也
古今に ひとあわれむとむらゝおと

天下はらゆるゆくけをきこし一ののぬ

世をひきかひのぬあうく 論語よ及其
老也血氣既衰戒之在得又云老而不死
是為賊と云ふ本又云もかうくさうや

文致十丁亥冬十月於益城下郡砥用郷原町村
自廿六日起筆廿八日上之一卷写畢

遜齋 中村直衛

世は人の心まじりし事一色歎くまあづべ人の
うらみはとらり物れおほひかどはかりれ
ものなりまあづく秋裳おを記ものすま志
りかづりえかうぬにむひしし必ふらたわさる
物也久氣老人の物流ふ女の腰は白さとて
色とうさうひくんのぬまあづはさくおどの
きよは度ふ肥あづはさうんハおのま
むらもあうんう女はかめめさうか
人のあつらわれ人おほいごんま
うらひひさるまひしし物おにま
れまあれてうらあかゆも人かんとま
けまて女おうらけらるも縁も

しもねりひあすをぬぐもあしぬわさ
もよくとたしづきをあをねりふかゆ
りり留しし愛あはれその様ふく深き
ふ塵の樂歎おほしつてもみ分賦離れ
けし其なりきたはばまじひのひさつ屋め
るはのこを元らもわつたも初めるも思わ
もうはは下りしこみゆるこれと女の後を地を
よねる網はは大象とよくつをねれ女のこを
あしごしそ作さる節々も秋の麻ふゆはよ
ねくうしひはゆえゆるうづしつ海めてねる
ぬくはくをむつてよいあまもひも
世は人の心ゆぐる事 礼礼礼運篇 飲食

男女人の大歌存焉 程伊川曰 涵声美色易惑人
涕氏多智小人法んまじくはむしとていふ事
くらかりはものゝやとくういふ
白氏文集第四新樂府古塚狐妖且先化病人
都色好見者十人八九迷假色迷入於若色真
色迷入應過此彼真此假俱迷入也
衣裳にふれりあをとく 白氏文集樂府太
行跡云為君蒼衣裳君聞柔靡射不馨香
者君盛容飾君看余羽年無都色
えりぬハ手妙小然あしぬはねりう
ゆうかりとあり えしつたぬ義あし
んといひあしり 枕草紙小人いひあし

すりもあふききりたものゝごとくひんか

久米は仙人 元亨秋書十八久米仙者和州上
郡人入深山学仙法食松葉服薜荔一旦騰空飛
過故里會婦人以足踏浣衣其脛甚白忽生染心
即時墜落漸喫烟火彼塵寰然御黨契券當署其
名皆書前仙某今曰券中往々猶有手澤悉然
常於高市郡宮精舍鑄丈六藥師金像并二菩薩
像所謂久米寺也後又修仙凌空飛去又有大伴
仙安曇仙二人与久米相後先兩仙菴基今猶在
和州 贊曰昔孀女誓曰我不跨一角仙頭不出
山果然久米見白狂而墜有以笑哉於戲色之毀
人也可不慎乎

外はいろ かり乃色あり
世にうりは去者くはくとのまゝとて人乃
ふとらうかば事とひり白氏を塚に柳の
ふをりて一絶もも六振六垂つれもらね
迷悟のころりくくつるれ秋氏をよきと
論久米は仙人が事ハ波羅索國に一角仙人が
廟祀女が頭にはは髪をり異波沙論ハ優陀
延王あまのけ宮女とひさしをて鬱毒波陀山
あそびひり一五乃乃仙人窟室とらまひりか
はとらうとらまひりあそびひりあそびひり

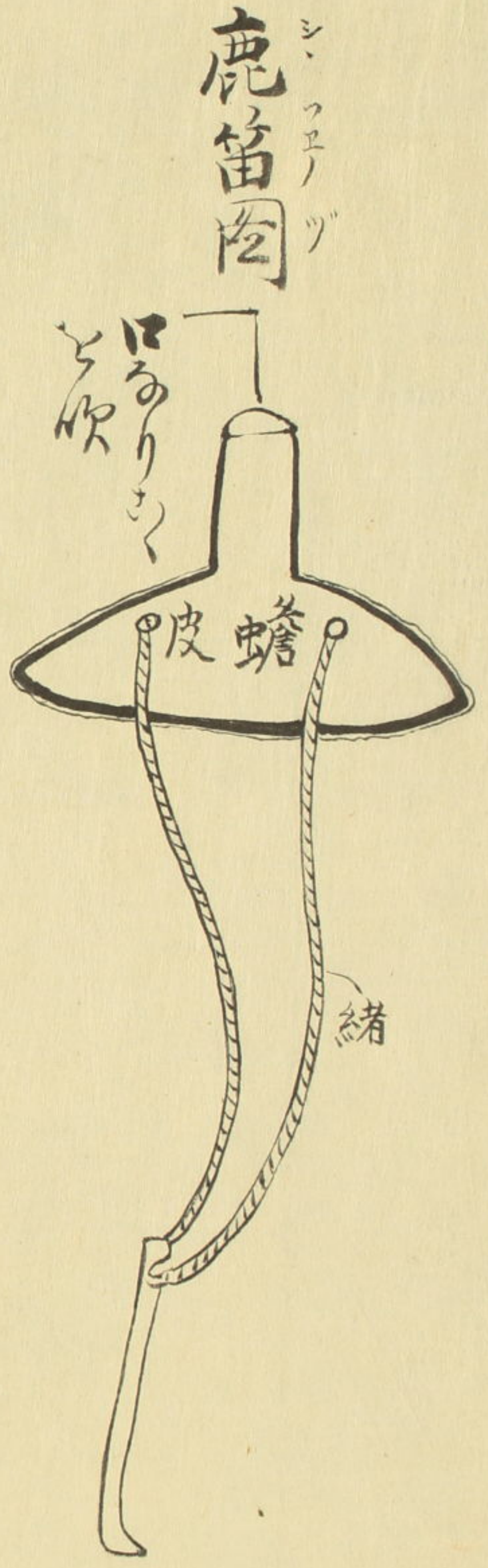
神是(ジンシ)とてうまひ山林のうりに居(イ)る事(コト)翼(ツバサ)が
能(ス)く飛(トビ)く事(コト)王(オウ)さおと女(メ)とんり事(コト)とつる
けりき^レ成(ナ)れりて^レお百(ヒャク)の仙人(センプン)が手足(テヲ)とまりぬ
小人(コジン)眼(メ)滅(メツ)区(ク)は^レ位(イ)なるあり^レ身(ミ)滅(メツ)区(ク)に位(イ)た
るもあり^レ鼻(ハナ)滅(メツ)区(ク)は^レ位(イ)なるあり^レえれ^レ佛(ブツ)の玩(ウソ)り
目(メ)眼(メ)よ^レま^レとんり^レ好(コト)眼(メ)とす^レ耳(ミミ)鼻(ハナ)口(クチ)又
あ^レり^レ他(タ)は^レ女(メ)人(ニ)と^レて^レも^レ我(ガ)が^レ母(ハハ)と^レ我(ガ)
姉妹(アネイモト)の^レい^レて^レ我(ガ)は^レい^レて^レ思(オモ)は^レい^レか^レん
そ^レた^レと^レん^レや^レあ^レく^レい^レ畫(エ)巻(マキ)の中(ナカ)に^レあ^レ淨(ス)と
り^レり^レい^レて^レ淨(ス)と^レる^レ血(チ)ど^レり^レり^レて^レ軟(ニ)く^レて^レお
ま^レあ^レり^レあ^レく^レ四(シ)大(ダイ)因(イン)縁(エン)假(カ)合(ゴ)は^レ物(モノ)なり^レと^レも
い^レて^レ久(キウ)款(コウ)と^レ動(ウツ)の^レた^レなり^レて^レ結(ムス)むも^レ見(ミ)も

ち^レは^レま^レも^レち^レず^レう^レだ^レも^レせ^レぎ^レん^レハ^レ眼(メ)耳(ミ)鼻(ハナ)は
あり^レか^レひ^レな^レす^レ山(サン)谷(コウ)ハ^レ桂(ケイ)香(カウ)と^レき^レて^レ禪(ゼン)と^レは
と^レり^レ少(セウ)陵(リョウ)ハ^レ妙(ミョウ)香(カウ)と^レき^レて^レ人(ジン)清(セイ)ま^レの^レ在(ザイ)子(シ)も
鼻(ハナ)徹(テツ)と^レ顛(テン)と^レを^レせ^レい^レひ^レ道(ダウ)家(カ)ハ^レ鼻(ハナ)神(シン)と
靈(レイ)聖(セイ)と^レ名(ナ)は^レく^レ鼻(ハナ)ハ^レか^レく^レ流(リウ)い^レか^レん^レう^レ耳(ミ)目(メ)
は^レ見(ミ)聞(ブン)ハ^レ異(イ)なる^レ人(ジン)や^レ聖(セイ)賢(ケン)の^レた^レ鼻(ハナ)よ^レか
く^レと^レり^レハ^レ四(シ)勿(モツ)九(ク)思(シ)乃(ノ)介(ケイ)介(ケイ)り^レと^レて^レも^レ思(オモ)を
と^レり^レハ^レ思(オモ)真(シン)と^レい^レく^レい^レて^レも^レ思(オモ)を
不(フ)潔(ケツ)ハ^レ人(ジン)ハ^レ鼻(ハナ)を^レ掩(オホ)ふ^レの^レふ^レ附(ツ)ハ^レ物(モノ)の^レ鼻
思(オモ)ハ^レ鼻(ハナ)より^レ入(イ)り^レて^レ由(ユ)と^レい^レて^レも^レ思(オモ)ハ^レ鼻(ハナ)より^レ入(イ)り^レて^レも^レ思(オモ)を
事(コト)なり^レ
女(メ)は^レ髪(カミ)の^レた^レら^レん

詩君子備先菊鬢發如雲不肖魁也
左傳昭廿八年晉有仍氏女嬀黑而甚義光
可以鑑名曰玄妻
又選西京賦衛后
身於鬢髮飛燕電於酥輕
けしむし 河海小氣の字とよめり日本紀
小形勢しうき 新猿樂記 景氣とあり
ららありさゆ 水洗にうらあり人ふぶに
とあり平人なふありあつをさ帝位新
の義ありきをふありさゆあり
うらうけらるいもゆと 拾遺 志うあ
保れさゆをねらふけらるいもゆと
此也

さうねぐもあしぬわさめも 徳者すぐ
とありぬましもよき徳をさるふあ
思ふさゆさゆり
愛著はらら 恩愛純者あり
六塵は樂歎 眼耳鼻舌身意と六根と
色声香味觸法と六塵と
さうかゆゆと 六欲をさゆ
いりさるひの心路をけきと入と入
わら人さるふ
女の髪をさるふ綱ゆを大蒙とさる
つるん 成人の女の髪を大船とさる
くさる事 梵網経に説くさるん女は

はぢりて候^{アジガ}てははぢりて候^{フエ}笛



あり人^{シフエ}は^ツや^ツまれ^ツて^ツ近代^ツ冬^ツ河^ツ田^ツ女^ツ歌^ツ人^ツ
 邦^ツよ^ツの^ツ名^ツあり^ツ花^ツ女^ツは^ツけ^ツる^ツ辰^ツを^ツこ^ツり^ツ
 て^ツ仰^ツり^ツ笛^ツに^ツほ^ツら^ツり^ツて^ツ阿^ツ志^ツ山^ツ中^ツへ^ツ入^ツれ^ツ
 と^ツゆ^ツく^ツよ^ツ麻^ツの^ツ根^ツを^ツく^ツり^ツ事^ツ常^ツれ^ツあり^ツと^ツ
 して^ツ作^ツら^ツる^ツ笛^ツも^ツあ^ツる^ツも^ツゆ^ツく^ツり^ツて^ツあり^ツ
 〜〜〜り^ツ候^ツり

麻^ツ笛^ツの^ツ作^ツ候^ツあり^ツあり^ツ麻^ツは^ツく^ツり^ツて^ツあり^ツ
 皮^ツと^ツ用^ツり^ツも^ツあり^ツ又^ツ麻^ツの^ツ半^ツの^ツう^ツら^ツは^ツ皮^ツと^ツ用^ツ
 くと^ツ〜^ツ笛^ツも^ツあり^ツと^ツあり^ツと^ツ吹^ツく^ツ〜^ツ口^ツと^ツ
 て^ツや^ツ〜^ツあり^ツ

太平^ツ廣^ツ記^ツ四^ツ百^ツ四^ツ十^ツ二^ツ云^ツ江^ツ陵^ツ松^ツ滋^ツ林^ツ村^ツ射^ツ鹿^ツ若^ツ
 率^ツ以^ツ洵^ツ河^ツ鳥^ツ脛^ツ骨^ツ為^ツ管^ツ以^ツ鹿^ツ心^ツ上^ツ脂^ツ膜^ツ作^ツ簧^ツ吹^ツ
 作^ツ鹿^ツ聲^ツ有^ツ大^ツ號^ツ小^ツ號^ツ吹^ツ々^ツ之^ツ異^ツ或^ツ作^ツ鹿^ツ鹿^ツ色^ツ則^ツ
 麋^ツ鹿^ツ果^ツ集^ツ蓋^ツ為^ツ北^ツ麓^ツ所^ツ誘^ツ人^ツ得^ツ鼓^ツ矢^ツ而^ツ注^ツ之^ツ
 山^ツ麋^ツと^ツ玄^ツ獸^ツあり^ツと^ツ内^ツ神^ツ蓋^ツけ^ツ切^ツあり^ツ事^ツ海^ツ
 狗^ツ頂^ツ湯^ツ肉^ツ皮^ツ蓋^ツを^ツく^ツり^ツも^ツく^ツり^ツて^ツあり^ツ
 とも^ツゆ^ツく^ツ〜^ツ候^ツり^ツ山^ツ中^ツ小^ツ
 け^ツり^ツ山^ツ麋^ツの^ツあり^ツあり^ツと^ツあり^ツと^ツあり^ツと^ツあり^ツと^ツ

もよまの山嶽女は氣をうらぐとありき
つたぐ山嶽女は氣をうらぐとありき
其本より地中の穢師見とてふふい
海りい事一本網目ふとてふと鹿女れ
殺の笛をうらぐとありきおひりり
みづうらぐとありき 自警とてかへ

朱又公自警の詩十年浮海一身輕歸對
梨澗却有情世上無如人欲險幾人到此誤
平生とてありは約のふと家お胡澹菴忠
肝義膽ありて秦檜が國政とあやまり事
をいさぐとありと秦檜とていふと長
を悔しめるとありとありと十年とあり

ゆりこれ還りては湘潭とて酒との心
秋情とてありと女と願時とて秋頰生澗澗
とありと事とて朱子かて作りて自警と
せり微澗の咲は彩とてくははありとあり
黎倩とて秋夜ふとてありと急好が色秋の
ゆりいといとみづかてありとありとありと
ゆりい朱子かてはははとありとありとあり
澹菴が筋義秦檜が威とてありとありとあり
澗小信ありとありとありとありとありとあり
竟とありとありとありとありとありとあり
くありとありとありとありとありとありとあり
流し周郎とありとありとありとありとありとあり

小喬の由りてはもあつて況やも
おれ人誰うよく色欲を断んや朱子の
つらういふれは油こゝに大貫君
子めらるる

家名のしきくあつていふ
けやうのしきくあつていふ
おれ人誰うよく色欲を断んや朱子の
つらういふれは油こゝに大貫君
子めらるる

ひりつておれ人誰うよく色欲を断んや朱子の
つらういふれは油こゝに大貫君
子めらるる

つきのしきくあつていふ
おれ人誰うよく色欲を断んや朱子の
つらういふれは油こゝに大貫君
子めらるる

逆様 寄寓

持心乃山人也

をくしてやい人を思ひて京の店に月もあみ
りり致もなみりりはあつては辰とるや
い海ありくきくあつてはうふふ
くきくあつてありあつては辰とるや
あり

本ごらり物ありていざとるぬ庭のまわご
とねくねくをりはくわくは自然の神
あり陶淵明の所産物以怡然とるひ又本
飲以向來とるひ周茂村が室和茶とる
りぞして自家は思ひて一般ありとる
様のひやとるや
そのこ 漢子とる書

まいごい すいごらり透酒か
どうぞ 潤店とるやあつては辰とるや
うなる物とるふとるあつては辰とるや
戸りりの物具とるふとるあつては辰とるや
よて中辨要畧村とるやあつては辰とるや
懸一人二人若千人とるやあつては辰とるや
くなる人とるふとるあつては辰とるや
たはくはあつては辰とるやあつては辰とるや
番とるやあつては辰とるや
唐は日本あり 唐物日本物ありあつては辰とるや
云 前裁の弟はあつては辰とるや

枝をたぬ茶葉とさう〜わびとほくろいもを
と好所あり

なが〜く信ぐよ〜又付のよはりありやもかり

れん 白樂天履道居詩莫嫌地窄林亭

小差厭家貧活計微支少朱門鎖空宅主

人到了不終歸又兵賦廢宅詩不獨凄凉

眼前事咸陽一火便成原

おれ〜〜ハ家ぢ〜〜を

家を作りは式快ハ居家必用と云ふ〜

又〜〜あり雅尚爾〜〜燕閑と遵生ハ箴〜

乃〜〜ありま〜〜お〜〜ま〜〜家ぢ〜〜を

よ〜〜好じ〜〜ありあ〜〜ま〜〜去秋〜〜相宮〜

楹〜丹ぬり〜あり〜〜以刺〜〜ハ〜〜の論議

〜藏〜仲〜〜茶葉〜〜〜〜公子荆〜〜居

室〜〜〜〜あり

存法大寺大匠の寢殿シンテン トビ葛わら〜〜をたん

〜れ〜あり〜あり〜西り〜〜葛れ〜〜ん何

〜ら〜り〜〜ま〜は殿の西ん〜〜り〜

〜と〜の〜ち〜ら〜り〜り〜り〜り〜後

小路コウヂノミヤ言乃あり〜〜小坂の棟ムネ〜〜り〜

俺を〜〜れ〜〜り〜〜は〜〜り〜〜り〜

ゆ〜〜湯や島カラス志カラスむ〜〜み〜〜池の〜〜り

これハ清徳公の御まを致してまんと人乃より
しそをさすといひしきくしそをせんがゆ大ち
もみりゆりゆりゆりゆり
法大寺のおおまの實定公也
西行東鑑云依坂兵衛實清法印今号
西行保延三年八月道世より以秀卿九代
嫡孫や陸奥守秀衡入道者上人一族や
井蛙抄曰法大寺は秋の間よりふゆの寝殿
乃西行角の房也是法大寺の西行
被對面けりゆ也

綾小路を

鳥乃むまあて 白樂天大嘗鳥詩探集
吞燕卵入竹族咏蚕虫とあれはうの房とより
くふれきいあきび

祚を月法法栗栖野よりよはをさしてある山里よ
くつひ入事結しそをさすり若はほうり
あまのむまあてんがまをさすり
葉よりむまあてかけ樞のあつてまをさす

とるよ地か 阿伽棚 菊の葉をわらじ
をりきんがさび人乃あれあゆぐかきも
あつれりよとあつれふりやとつれり
庭に松がきぬる 棋子乃木の枝もさしよなり
とれが下つらひきびくこひらうしを
とあしとこめてははるうらまへとあつる

栗栂 能破れ也又沙つ常院山城
國小栗栂路傍 葉をやく釋書あり
萬葉 けし枝のくはらふもの 疾れむお
阿んすぬつて手白ん
阿伽棚 霜ゆる水は枯れ也 阿伽た云

枝もたきい 枝のたつむ事あり
古今わりてらんいぢりさるぬら 秋萩の枝
もたきいをさるしは花

杜子美 呈吳官待堂 扈東任西鄰 每食
無見一婦人 不為困窮 寧有壯祗縁 恐懼
轉須親 即防遠客 雖多事 使揮踈籬却
甚真已 訢徵求 貪到骨 正思戎馬渡 盈中
吳郎 一云の來て子美 瀼西の家 居
きり之堂 亦く東あり 西鄰 若寡婦 ぬ
をみりりてく 事い貪るさゆ かく
をり也 彼をり 一と けり みる 念
はとく 由して 割禁 へく ずくれども

他は竊盜ユウゾウのあせぶのためは難ナカシをいふべし
素ソとくつを停止テイジせむるあはれ此婦コノメの
貧困ヒンコンとて世間は思ひおぼれ
しやと也子コノコ義ギがよと推度スシめば仁政ニセイなる
べし文王モンメイは國クニ一芻蕘コウゼウ者モノ社鬼シャクイ者のゆも
はんたりと子義コノギが素ソをわしよらる兼好
が宗栢ソウハク野ノの山里サンリは栢ハク子コをくひひりぬき
つゆんよぬき
此山家コノヤマカは景氣ケイキとよきとありてありぬ
きやうよわきと栢ハク子コとまじりくくひ
しとて思ひおぼれしやとありぬき
るんされども山林サンリンの法禁ホフキンハ非常ヒョウジョウはぬき人ヒトと
あきくこれいふよりうぬもあはれ
が物モノをわしよのせむかりありぬき
和橋ワハシがすのいさひとて銭ゼニをくきり
王安ワナン豊トヨがすのいさひとて事コトとまじり
きよとまじりてうぬ陰カゲが素ソが栢ハク子コ野ノ人ヒトと
わしよと王ワウ儉ケンが帳下チヤウカと栢ハク子コをくきり
これ愛憎アイソウとてありぬき
うぬあはれ日本ニッポンもあはれは六波羅ロクハラクの
ゆつ海ウミ伝デンをわしよとて帝ミカドの愛アイをわしよ
しよとて死シして地チとありて栢ハク子コの根ネとま
じりてありぬき

於此 ^ハ 心 ^ハ 人 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 夫 ^レ 世 ^ノ 功 ^ハ 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル

う ^レ 心 ^ハ 素 ^直 ^ニ あり ^テ 心 ^ノ 底 ^ニ 残 ^ル
 義 ^ヲ 行 ^フ
 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 う ^レ 心 ^ハ 素 ^直 ^ニ あり ^テ 心 ^ノ 底 ^ニ 残 ^ル
 義 ^ヲ 行 ^フ
 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 う ^レ 心 ^ハ 素 ^直 ^ニ あり ^テ 心 ^ノ 底 ^ニ 残 ^ル
 義 ^ヲ 行 ^フ
 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 う ^レ 心 ^ハ 素 ^直 ^ニ あり ^テ 心 ^ノ 底 ^ニ 残 ^ル
 義 ^ヲ 行 ^フ
 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル
 う ^レ 心 ^ハ 素 ^直 ^ニ あり ^テ 心 ^ノ 底 ^ニ 残 ^ル
 義 ^ヲ 行 ^フ
 心 ^ノ 志 ^ハ 物 ^ノ 終 ^ニ 於 ^テ 振 ^ル

あつてふはあつたまればら益なかりぬ
人まれのまひんぬぞと人みりびつらん
むななり

おもりムナシ燈トウのトウも又ムナシひろムナシむせのムナシ人と
文選はあつれたりと白氏文集も子つる家
南苑は倉い園の情をいひもるゆい
のいあられりりまーぬり
詩云時秋積雨霽新涼入却墟灯火稍可
辨還之符讀書城南
親ムナシ方ムナシ篇ムナシ可ムナシ卷ムナシ節ムナシ

親方篇可卷節
之とむらり
推展

唐書狄仁傑為兇時以人有被害者史浩象
辯對仁傑補書不置吏責之仁傑曰黃卷中方
与聖賢對何暇偶俗吏浩耶 司馬溫公独不
園記迂叟平日讀書上叩聖人下友群賢
コトコトあり
ハテ妙かけりりやく云義あり
文選 梁武帝子昭明太子は撰とらゆ也周
汝末より六朝までの詩文とあつて本あり
唐の李善を記すと世ふむらじ李善が

本小臣延濟劉良張鏡呂向李周翰六人乃
詔之曰今之六臣詔之曰今之六臣詔之曰
李若言注之曰今之六臣詔之曰今之六臣
詔之曰今之六臣詔之曰今之六臣詔之曰
今之六臣詔之曰今之六臣詔之曰今之六臣
詔之曰今之六臣詔之曰今之六臣詔之曰

白氏文集 唐乃白樂天集也わつさしめらるる
長慶年中ままでの詩文集也あつめて白氏長慶
集と名づくお十巻とて五帙を元禊序
ありまき度ひたのど加て七十五巻とて白氏
文集と名づく今世よく行つるを七十一巻
あり十帙をより帙の書存あり書籍とは
ひもの也渤海ははるありて常並柳の詩と

是て白樂天也似るるといふたれは並相も
らびゆつとともん 詠歌大統おも白氏文集
一丈二帙常と推統とてわあり
老子 姓を李名を耳字を伯陽又を聃をも
あつて楚國の人あり周に仕へて柱下史と
なり周を去て西へゆつ時函谷関をて関令
尹喜小を道五千言とてわつと授く今れ尤
子悦もよりり八十一章あり漢に河上公を
注し又は道德經とも名づく宋の末に林希
逸は口義あり
南華北篇 莊周字子休宋人也 隱遁して
書を著し清を子道德は意よりとつと二

十三篇あり南華志記にも名はく晋の郭象
是と注し唐の玄奘が翻あり宋の林希逸が
口義あり莊子が文章ハ古今の奇筆あり
老子も莊子も史記の傳あり
世國は博士も博士は博學得業人也官
位令の紀傳明經明法等道は四家右博士と
をてあり日本は博士も文集みは懷
風藻一卷經國集廿卷本朝文粹十卷續本
朝文粹十四卷文華秀彙集三卷無題詩
十二卷は類多し又一家あてハ野相公が集菅
家文草善相公が集都氏が文集江吏教集橘
在列集漁吹集おの類なるべし

此は一本よみと文選老子は詞とありてあ
りれるをよむ白氏文集とあふをよむ
よりいづれおぼはれ

和歌こそを瓜切りと物おれあやむはまづ
山づら乃志わごもしひまつまはかりわくをそ
ゆよは精のあつてもあは精の麻とりのあつて
かりぬあは法の歌ハ一あかりとくひひり
とありとるあはれとるこあつてものあつて
いづれあはれとるあはれとるあはれとるあ
はれとるあはれとるあはれとるあはれとるあ

たに集の中乃歌ぐつこやいひつきんれど
々乃世の人のみめぬべしつらうとたふとびま
その歌ふくすつてはなこのころひのさかぬ
いぢりぬてかづひはそつらぬるもあむら
源氏物語の物モノはなつらぬる新編の
乃つらぬるモノ筆のさびしきつらぬる音と
うらぬるモノつらぬるさつらぬるさつらぬる
さつらぬるさつらぬるつらぬるさつらぬる
つらぬるさつらぬるつらぬるさつらぬる
つらぬるさつらぬるつらぬるさつらぬる
つらぬるさつらぬるつらぬるさつらぬる
つらぬるさつらぬるつらぬるさつらぬる

いしむる物ありはやとくすれ
て安もきさむげありぬもつらぬるモノ梁塵秘抄
乃モノ邱曲のモノつらぬる又ありぬる事いぬる
者の人いふつらぬるさつらぬるつらぬる
いしむるさつらぬるつらぬる

和歌くそな紙のまどは二まうた異年
りし和歌は紙と一紙をばたな紙乃家
文選老子かどまありてけり詞あり
魚
於しはるねりつらぬる
たさつらぬる紙ハ雲抄モノ連法師かむら
あつらぬるいしむるさつらぬるつらぬる

おろし物〜まののよもいさわの麻々〜ひひつ
まはやあ〜ま也由〜てお〜き物とねを
う〜ぢに〜し〜る〜た〜ま〜ト〜ね事〜あり
河の外よ 子貢の貧し〜し樂し〜ととやん
約と川子夏は待と官て禮と俗とさうり〜を
と知り〜れし楊龜山曰非待之言意之表者
能之乎高賜可予言詩者以此也
和あ〜とよま〜のものもふ〜く〜と〜あり〜
貫之が〜い〜た〜ら〜りの〜さ〜ら〜ぬ〜に 古今九
齋旅部〜あづ〜ま〜下〜る〜と〜ける〜耐〜た〜と〜ある
系〜ら〜り〜りの〜さ〜ら〜あ〜く〜り〜別〜れ〜ら〜ぬ
そ〜く〜も〜ね〜の〜か〜ゆ〜り〜哉 貫之

古今集持中の歌くわ

徳氏物浩あまののよ〜に
深氏徳角〜わが〜あ〜み〜を〜い〜ま〜に〜ぬ〜る〜ん〜と〜う〜ち
ぢ〜し〜あ〜ら〜り〜の〜せ〜の〜ご〜も〜か〜う〜し〜た〜あ〜り〜け〜れ〜ら
し〜う〜ぢ〜ら〜も〜う〜ち〜ら〜ん〜の〜あ〜ら〜り〜が〜あ〜れ〜ら〜ぬ〜の〜と〜
あ〜ら〜ん〜も〜つ〜ま〜し〜う〜て〜物〜は〜れ〜ら〜ぬ〜と〜も〜貫之
い〜せ〜を〜ご〜ら〜ら〜れ〜ら〜ぬ〜と〜た〜ら〜ぬ〜も〜あ〜ら〜ら〜ぬ
い〜ま〜ら〜ら〜ぬ〜と〜も〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ
の〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ
と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ら〜ら〜ぬ

のふらふらとあつた書あり

新古今にありふ松さく

祇部成伴が前よをたさそ山も河もふ

木の香あり残る松さく 峯にきびひく

家長 後多持院の時の人也新古今深家

和歌新古今盛みぬてけけめそ 糸つー日巻

侍ー 藤垣草かくともは幾ー かん

代は教よ後をく和歌新浦波家長い高

明公の十代の孫也 右馬助前但馬守

新古今のいーいふろろぬ 心およふ

けがまほもろれのりごもゆろろけいよさ

はた斗未代み絶つーをこくさるいー

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

いさや 不知さきりいめーにろろな

過行雲謂其友曰昔韓娥東之齊送粮過雍門
鬻歌假食而去餘響遶梁三日不絕者故雍門
人至今善歌尖效娥之送聲也

けね事ありてうらみの伝承といふ也

郢曲 元祐梅詩 郢曲琴堂奏瀛奎律範

載たり 又選宋玉蜀楚王問答有歌於

郢中者其始曰下里巴人國中屬而和者數千人

之為陽河燕霧國中屬而和者數百人其為陽

春白雪國中屬而和者數十人引南刻羽雜以

流徵國中屬而和者不過數人而已是其曲強

而和殊寡 郢ハ楚國都也 其後乃歌強と郢曲といふ也

ニヤクニ 言種ト云

は後と初後と合きて一としてんもよろし

文章詩賦和歌郢曲は事とて中よりい

とあつて今と議たりとぬ世の人といひ

一のいあられなりといひはははあまといひ

さうもあつて今と議たりとぬ世の人といひ

とあつて今と議たりとぬ世の人といひ

とあつて今と議たりとぬ世の人といひ

とあつて今と議たりとぬ世の人といひ

と評論を承り

いづくともあれあり様ありてそのまじり

それそのわりありありとありてそのまじり

山室おぼろしくあわれぬ事のもぞおぼろしく都く
くまりのあて又何の事か一の事位をわ
りあてどひやりこそたれくたれあやうき
こころもあやうき心もあやうき調度また
よれたまへぬある人さうりよれたまへぬ
うしこころもあやうき事社よとて思ひてこころ
もおろし

神樂こそあたまめく様りつる
ものゆゑに笛筆筆常一すたれたる
初舞

神樂のたより王恩を奉天の志を
てこのあてにひり内王下さやみより
法印ありやまに天御命内
うばをわづひげとあたま
てうしこころもあやうき事
まねり古語拾遺ふり深層秘抄
ゆは深山ありあはれ
さなれうしこころもあやうき事
のあてのあはれ又内侍は神樂の

一原ははつたよりと南年小行り
保り毎年一りふ所礼の礼の内侍
可西國へ一りせひて二年とて
之りせひせれハ三ヶ秋は神樂あり
別して原ははつたよりと一り
神樂の付主上り奉りて座とて
御座座とて一りも笛箏篳篥
と御座座とて一りも舞一り
奉りも一り一り公事根治所
和琴一りはあつて一りも
代りたりと一り一り一り
琴にのりて一り一り一り

日中にて一り一りの樂器
より花の餘花の席と一り
此器の一り一り一り
一り一り一り一り一り
小節一り一り一り一り
あり一り一り一り一り

山寺一り一り一り一り
はれ一り一り一り一り
一り

人にまのれどつづゆやふり—たうと遠けし賦と
もむせふむがうらんうい—うらむいひら
しよりか—せん人は何ういふれ也もうお—に
汗キヨユリゆ—いひたりの人いひふか—あふぐん—をく
り—もく—て氷と—も—りけと飲らぬんを
かりひき—このふ物ぬ人のえさ—い—はき—有付
あむ枝のうも—あ—したれ—風—あ—き—てありらぬ
か—う—あ—と—を—つ—み—む—む—び—て—う—水—
のみ—う—ら—い—ら—あ—ら—ん—は—う—ら—ん—を—い—かり—ん—孫
衆—あ—れ—月—小—傘—あ—く—て—葉—一—束—あ—り—ら—る—と—う—ん—な

是あり—の—あ—れ—ま—た—あ—ら—り—の—り—の—人—
うれ—ど—の—
つ—ら—り—
は—ら—り—
し—ら—り—
孟子精文の上篇—有る不—仁—不—義—美
こありり伯夷叔齊—の—首—陽—の—ふ—
や—ら—り—
審—の—
もり子夏—の—
棠—と—監—河—
た—ら—り—

てらし陳^{チン}山^{コウサン}ハ衣^イとまりどきて定^{コト}ふりやう
やうり人^{ニヒ}おぬり

許^{キヨ}由^{ユウ} 充^{キヨウ}天下^{テウテウ}をゆぐぐんこのほひれども
交^{ウチ}ぢしとて去^シ事^シ一^{ニヒ}莊^{シヤウ}子^シも見^ミてり

言^{コト}士^シ傳^{デン}許^{キヨ}由^{ユウ}隱^{イン}箕^キ山^{サン}以^ニ手^テ捧^{サウ}水^{スイ}飲^ク人^{ニヒ}遣^シ一^{ニヒ}瓢^{ヒョウ}
得^テ以^テ取^ク飲^ク々^々沆^{ハウ}掛^ケ於^ニ樹^{ジュ}上^{ジョウ}風^{フウ}吹^{フク}歷^{レキ}々^々作^{サク}色^{シキ}尚^{シヤウ}以^テ
為^シ規^キ遂^{スエ}去^ク

かりひここ かく也 和名集^{ワナミツ}云^ク瓢^{ヒョウ}祭^{サヒ}
利^リ比^ヒ佐^サ古^コ 斟^{シム}氷^{ヒョウ}器^キ也^也

ん乃^ニうりやうらん ん乃^ニ清^{セイ}涼^{リョウ}あり也
自^シ樂^{ラク}天^{テン}が詩^シし 但^タ結^{ケツ}心^{シン}神^{シン}只^シ乃^ニ涼^{リョウ}
臨^{リン}晨^{シン} 崇^{スウ}於^ニ云^ク 祿^{リク}晨^{シン} 字^ジ元^{ゲン}公^{コウ}家^カ貧^{ヒン}織^{オリ}席^{セキ}為^シ

業^ト於^ニ詩^シ書^{ショ}為^シ京^{キョウ}兆^{テウ}切^{キツ}曹^{ソウ}冬^{トウ}月^{ゲツ}元^{ゲン}被^ヒ有^ユ菜^{サイ}一^{ニヒ}
東^{トウ}暮^モ外^{ガイ}朝^{チウ}収^{シュ}

もろあし人^{ニヒ}とあれといふとむらひかた
代^{ダイ}の史^シとるるに太^{タイ}史^シ公^{コウ}が伯^{ハク}夷^イ傳^{デン}と作^{サク}り
よりほせの心事^{シンシ}とるるもの隠^{イン}逸^{イツ}れもの
ふめい傳^{デン}とてとてとるる事^{コト}も
濁^{ダク}富^フの法^{ホウ}貪^{コン}み志^シく物^{モノ}事^{コト}とるるも
らるる大^{ダイ}的^{テキ}高^{コウ}濼^{ニク}ハ賤^{ケン}の終^{シュウ}りも塵^{チン}外^{ガイ}
遐^カ舉^{キョ}賤^{ケン}をあげて古^コ今^{イマ}ある世^セとるるて文^{ブン}
下^カとらん 或^カ俗^{ソク}とては貪^{コン}賤^{ケン}とあ
ゆるもの一^{ニヒ}百^{ヒャク}餘^ヨ人^{ニヒ}を乃^ニせりいみ
なりゆめあり

朽草乃うつりうつりうつりうつりうつりうつりうつりうつりうつりうつりうつり
 もねくあつれぬ秋をゆきねん人よよよあ
 れどうれしう物とくそくさふんともさあ
 ののいま乃たりしことあめれさのちか
 事は外よ春めだくのどやうなり日影よか
 のはるあもえのほろこあふり屋をきく
 わらうて死もやうく言ふことつやこそあ
 わしも雨風うちつごもくんあふりくちり
 すぎぬち紫よちりけきよら成もたぐん
 のこそやまほ花らりれらあよ花をさ
 む紙梅乃ちあひまぞいし事とまりり

こひうあひひそくちふのいひひ
 花のすがほあきさゆ
 くにんくおー 澄佛乃は糸のはつ葉の
 控濁くふ後うゆく御そあつあつれも
 人のあふもはいし人のあふもはいし
 げよう物なれ五月あやあはは早苗
 二海舟難はとうくあせ心あそくぬえ六月
 のはりやあきさゆ夕顔は白くそあき火
 あそるふもあつれ也六月後又あし七夕
 つねこそあふめくはれやうく秋をな
 らぬと鷹をさそくはころ萩のう葉をばく
 やどつら白うりあそあふらあつめく事

事とてちち〜こそあふふふ〜かくて明ゆ
く空はあまあけり〜あつり〜り〜り〜り〜り〜り
ひき〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
おま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あられわれ

おま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
そ子源氏物語〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
カ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
源氏幻〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
を〜り〜り
ゆの〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
拾遺書〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

ゆ〜り〜り 源氏去秋のあ〜り〜り〜り〜り
秋〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
白樂天詩大底四時心松苦執中晴軒
乞秋天

心〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
東坡書王夫人汝陰堂にて暮秋月と
現〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
德麟が侯鯖録〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
鳥乃抄を〜り〜り 陳國南野花啼鳥一般書
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

磔トウ鳴トウ春トウ會トウ北トウ間トウ不トウ可トウ無トウ我トウ吟トウ

乃トウどトウやトウりトウ日トウ影トウ 世トウ深トウあり

東トウ坡トウ内トウ制トウ集トウ五トウ云トウ仙トウ家トウ日トウ月トウ本トウ七トウ余トウ送トウ

驛トウ逐トウ去トウ豈トウ亦トウ然トウ 杜トウ子トウ義トウがトウ待トウよトウ遲トウ日トウ江トウ

山トウ震トウ去トウ風トウ花トウ草トウ香トウあり

やトウいトウ去トウありトウ 去トウりトウ去トウありトウ

二月トウはトウ二トウ月トウなり

ちトウりトウりトウはトウ花トウのトウ葉トウ 王トウ駕トウがトウ待トウよトウ雨トウ

花トウ初トウ見トウ花トウ宿トウ葉トウ雨トウはトウ急トウ無トウ葉トウ底トウはトウ

花トウ心トウとトウありトウをトウやトウまたトウ 王トウ荆トウ公トウがトウ去トウ久トウ

花トウ久トウ眠トウ花トウ心トウはトウ雨トウにトウもトウうトウふトウ下トウ

花トウ心トウとトウありトウはトウ花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

花トウ心トウとトウありトウ 花トウ心トウとトウありトウ

りてあをわぐりのの義之彦謙が後ふあ
どやり又詩人の家よりゆくと希村の
一枝園林の守樹ついで雷の時の音とわりの
うらん
山吹のきこゆふ

注佛はころろ 乞より夏はと秋のふ也
灌佛は四月八日おたねのけは佛は舎を
推古天皇よりけりける釋迦如来の俱毘
藍城よて生れ給ひける時天皇は下て水とそ
そとて秋尊にあつせりてと秋より公

事根活よりんころり

遵生ハ殿等三訂玄把經曰二月初八日乃
佛生日や周建子以子月為歲是也十一月
為正月や花王九年四月初八日釋迦生以子
至卯月是也二月や二月八日為佛生辰是
歎々不知者不考案建支於以四月為
本祝何は櫻吹
祭はころ 賀茂の祭とも也賀茂乃國祭ハ
四月中は申日おこりる是賀茂を本祭
をりて一賀茂祭ハ中は酉日おこりて人
らあつひつりてとて祭り也前日賀茂
松尾は社司いあつひをりて也山祭ハ

欽明天皇より始り又申日より白鳥の頭成箱

と云事あり皆公を根源よ見えたり

白樂天詩碧梧線頭抽早稻

前逐晚涼

五月あやめりて三月 六年十九年五月に

勅ありて百官法人より高蒲は漫せり

くぐりけりん物に宮中に入つては

りし高弘仁式も有る日具も高蒲も

さるをく南後法おに極くあり公事

根源ありたり

拾芥云五月四日主殿密葬内裡殿舎高蒲

事又形骸お集云端午以高蒲或綏或肩

浚内云端午刻高文為少子或葫蘆形草

之辟邪王沂公帳子云明於知是年中以

旋刻高蒲象辟邪 荆楚記云五日以

待一人形懸于門戸上以辟邪氣

早苗と形恒ありありとありし

このつれなき子孫とて秋風をふく

白樂天詩碧梧線頭抽早稻

水鶏乃きくくくくくくくくくく

まじり膏にうらみとなくお雛式より

きしていれぬぬん 治氏明ゆる去秋の

花紅糸のきくくくくくくくくくく

あまきりくげともありきくに水鶏のうら

使除

拾遺風躰抄意條亦志法乃ねり多あり
いふまに故を火みまきけぬ物をゆふり
乃しれ

六月後 八雲抄よ云六月被邪許と云ら

あたるひるあまをこしとまわり河邊よむ十
串ききてあまの糸あまをまきまきり也夕又
ぬすり事也存撰に類哉川のみなそこ清
て照る月とりてらんやまがり人すり類い
これ月とく一に河原よゆり出て月の
あつたをみそととりありまらぬ六月晦也そこ
まきて照る月也何あつてあり定あつれ

注云んぬ月つゝ人の月も他人物も古人
六月は必出川原臨被又納涼及絲竹之遊
及詩歌之興恒例也不限晦日是称皆月被長
元之比或人記御倉小舎人來可奈皆月被之由
催之件被六月十三日也

公事根源よ云大後六月晦日百官こりく
々々朱雀門よあつまりて被とまら也六月十
二月二つびあり天武天皇は出河より娘新
又とりの家々に輪をこゆりこありみか月
は名越のまきりある人の子歳はのちあま
いふ也は秋と唱はるる中傳はゆりまらる

ホツミヤクジ

法性ホツミヤクジの告白ホツミヤクジに曰く事なるつよめ初も

あめのみをばりホツミヤクジのきりてももしくはるうま

は歩と祓ホツミヤクジしりしりきり

延壽エニシキ式シキす八ホツミヤクジは六月晦日大祓ホツミヤクジ祝詞イハヒコトとの

きふとらるホツミヤクジ今卜ウラナヒ部ベの家イヘ中ナカに祓ホツミヤクジとの

よ大目オホメして首末シユマツの玄茶ゲンチャ小異コイ也六月ロクゲツは国月クニツキ

あらし祓ホツミヤクジの河カハあをねんホツミヤクジやうホツミヤクジなはた月ツキ

よまてホツミヤクジのふく東艦トウケンよえホツミヤクジ

七夕セツタのつるホツミヤクジ乞イヒより杜ツルのホツミヤクジはるホツミヤクジ也

公キミの招マツル海ウミ云イハス七月シチゲツ七日ニチは祓ホツミヤクジねホツミヤクジのホツミヤクジ天年テンネン係ケイ

室ムロ七年シチネンより始ハジメまり乞イヒ巧カウ奠デンもホツミヤクジ七夕セツタのホツミヤクジもホツミヤクジ云

也ホツミヤクジ今夕イマツキの牽牛ケンギウ織女オリメのホツミヤクジ色イロ和ワるホツミヤクジれホツミヤクジ鳥トリ鶴ツル

天河アマノガハよホツミヤクジきりりホツミヤクジ翼ツバサのホツミヤクジ橋ハシもホツミヤクジくホツミヤクジ織女オリメと

りホツミヤクジすホツミヤクジとホツミヤクジ淮南エニ子シ統トウ符フ詣キ記キをホツミヤクジたホツミヤクジるホツミヤクジあり

香カウ花カとホツミヤクジそのホツミヤクジ供ク具グとホツミヤクジのホツミヤクジてホツミヤクジ庭テ上ウヘにホツミヤクジ文フミと

おホツミヤクジきホツミヤクジ竿ササおホツミヤクジくホツミヤクジよホツミヤクジふホツミヤクジまホツミヤクジはホツミヤクジ糸イトとホツミヤクジうホツミヤクジけホツミヤクジてホツミヤクジ事コトと

いホツミヤクジのホツミヤクジらホツミヤクジよホツミヤクジ二年ニネンはホツミヤクジ月ツキよホツミヤクジ必カナラるホツミヤクジよホツミヤクジとホツミヤクジありホツミヤクジはホツミヤクジ衣イ

乞イヒ巧カウとホツミヤクジ也ホツミヤクジ

風土記フツチキ曰イハス七月初シチゲツノハツミヤクジ七夜シチヤ酒掃サウサウ中庭ナカニワ施シ儿ニ延ヒキ設エ酒サウ

肺ハネ牽牛ケンギウ織女オリメ相會アヒカヒ守モリ夜者ヨモノ成懷ナリカヒ私願シカネ或曰アルイハス見天ミツク

漢中カンチュウ有アル奕エキ々ト白シロ氣キ光ヒカリ曜ヨウ五色イロハヒコ以テ此コノ為シテ徵シ應オウ見ミ者モノ

便拜願ヒトキタガハシ乞イヒ富トモ乞イヒ壽シユ無子ムコ者モノ乞イヒ子コ唯得タガハシ乞イヒ一ヒト不得タガハシ

兼求カミモトメ三年サンネン乃得タガハシ

やうホツミヤクジくホツミヤクジあホツミヤクジらホツミヤクジしホツミヤクジよホツミヤクジ八月ハチゲツのホツミヤクジ法ホツミヤクジ也ホツミヤクジ

鴈カキあはれてくはこ海

月ツキ令ツキ云ツキ仲秋ツキ之月

鴻雁カキ来カキ

萩キの下葉イロ色イロはくわど

季秋キの法也

おぼしき事

世ヨ終シ序シありきこと

ねしちあふぞはくわくもらんちりあ

まじこそむりけ人の物モノのまじりくる

あふ政場チのひひつまわりあ

かいやりまつづき おやりまつづきあり

らそむかれの字ジ 是よりあむとひ

とくありあり

深氏物語フカウヂの初ハジメ也ナリ

すさゆごと物ありて

深氏フカウヂあさぐわはきよ時トキあつきて人の心ココロどう

はそめる花ハナの葉ハはさるこもあはれあま

何月ナニツキは雪ユキはひりあひらるるあ

あさこののあはあはは世ヨのこもあ

あがれおりのあはれあはれあ

ねきすしゆききたりあひあはれ人の

あはれあはれあはれあはれあ

總角小法師のまゝさしりしとふりふるるを

すの月よりおろりたるをくわいして

河海云法少納公枕羊紙よすまぬしき物

ふいその月敷おろりしけさう又十列冷物ふ

十二月夜廂おろり日記よとすす乃も

り月の法月やあつた小物浴し守り人

きてこれぞあつたゆいすす乃月敷おも

あつたおろりしけさうありしとふり

ゆ佛名 十一月十九日よとす乃一日まて二日あり

或一夜之例ありは佛名と云い二世の法佛

は名号と唱て之根の罪と減ありん也減

佛名はあつたゆいすす乃切注をとりりしとふり

宝龜五年十一月より始り承和の法は毎年佛

名とて日おろりし法因よて教を禁教のより

格ふんよりあつた公事根原お載しりし

元亨叔書九叔静安後西大寺常騰学法相掌

居比良山讀十二佛名經禮拜修懺其声聞帝関

諸州間有聞者因茲勅賜僧官兼和五年奏置

宮中季冬佛名懺

荷前 十一月吉日を撰ふ先十二月小法りしつ

りしとて終て宮に侍は公卿のもあつた人の

もあり者あつた十後八墓小年お終りし幣

帛をもちしとて沙也先十後の先一八天智

此の如く山城國山階ありて昔は帝はちふ
りきれて山をかの里小行幸ありてまきく遊り
沙のざりて然るも崩れとつづくもあつ人
を唯沙のなかりしとゆふる可ふ落と
うたてけりいし不思議ありこととてゆりき
その他白壁天皇は四原のみまきき桓武天皇
は柏原の陵崇道天皇は八木戸の陵に明を
深あるはちとさきとて此のいふるはなむ
延喜式新年は祓禊祝詞の荷前きてちかす後
公事 禁中小行りてつりこと也
追催 公事招承云十二月晦小行りて今日し
をやりふ取あれば大舎人寮鬼とほり陰陽

寮祭文とて南殿のまきはちとてよめと上卿
以下是をわらふ殿と人ともあ後のゆふまで桃の
ら葺は夫してみり仏光門より入て東庭と庭
て院にはたは出づらぬは布もまきとて多く
しりす東庭朝餉臺盤所のまのみざりふ
燈臺とひらあくしとてまのまより追催と
云い年中の疫氣と拂ふ也鬼とつり方相
氏はち也四月ありてなううづりける面を
きて手に楯牙とつ又依子とて女人緝は
布衣着るりのを率て内裏は四門とあり
也慶雲二年十二月月初よりい年天下小百姓
多く疫癘小悩されゆりてゆあり 葉

さるふ俳の夜をねいもあふくも也戲めりか
れどもいりては礼をて周禮礼記論語ののせ
しうしうれよりほせは礼儀志のあつさごと
云事りて孫文文選より乃張衡の張衡か
東京賦小祥あり其辞曰來歲大儺駝除
群厲方相秉鉞巫覡探荊振子萬童丹首玄
製桃弧棘矢所發無禦飛礮雨散剛瘳必斃皇
火馳而星流逐赤疫於四裔然後凌天地絶飛
深稍螭魅斮檣狂斬蛇虺方浪因耕父於清
泠溺女魃於神潢殘孽魃與罔象殪野仲而穢
游光八靈為之震懼况魃與罔象殪野仲而穢
守以鬱壘神荼副焉對操索葦泪察區陬司執
遺鬼京室密清罔有不避焉又後漢志中五
ほもあり

四方拜 公事根源云元正礼寅の時天皇
属星をさるく天地四方山後と拜して年災
をさるくひ宝祚を祈りさるく儼して作らるや
は事りては始りともさるく仁和元年正月
寅刻に天地四方属星山後とをさるく
宇多帝は治就のあれど濫觴といふさるく
又白王極天皇雨と祈りさるく自澗河上たり
幸ありて四方をぬさるく冷ひたれと雨をさるく
少りりり也日本紀に載ればあれをさるくや

姫ももかへんきと属早と拜して吳雅と
除く執い天地瑞祥志しりあふとんり
只とたふはゆふりりそりりくちりり義あり
深氏あふひのきふあしとあふてくれもくま
うであひあ
たれ人のくあふとそむらげ 曾孫好志が歌
西まつる年あふふりあふふりあふふりあふ
ありんともあふりあふりあふりあふりあふり
と云也 鎮魂くちて王あふりあふりあふり
あゆくあふりあふりあふりあふりあふりあふり
して又あふりあふりあふりあふりあふりあふり
發揚よたれあふりあふりあふりあふりあふりあふり

よくおあふりあふりあふりあふりあふりあふり
又法しあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
例をひくもあふりあふりあふりあふりあふり
法あり
大跡のきあふりあふりあふりあふりあふり
系盛島尊は南海くあふりあふりあふりあふり
且将来あふりあふりあふりあふりあふりあふり
将来あふりあふりあふりあふりあふりあふり
ころあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
年あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

傳ふらん

は辰四季はうつりゆく姿月風物景氣は形
容筆にほらうらやみありて郭公とまきく紅梅
梅とうきくまきりて郭公とまきく紅梅と
あり雪とつらふありてとつひ曾丹があ
らぬは年乃みそらふあまきまでまにちりあ
るれをけりてこの秋きたりの木は葉おんを
ととてまにちりて風よ句ひをいひ
き宿ふむりれ力をあれらやとれ階とまけ
るゆく月おるまをまきつあけてまきくひ
この月口をのこまきくすれとつふむりて
人の四季とつひはくまらふ程もまらるて

は法正の二婦人をおとくと兼好が詞を
作り詩又うも又かくぞもて大觀凱之が四
澤の水奇峯は雲明暉の月孤松は嶺
東坡先生が四時の詞おるまて節節と感
ぢひといふ事ありてこの雅尚齋が四
時を述賞しう今一きくあはまらりて

容耐随筆十四云士と虎世見紛華盛麗當め
老人之持管物以上元清明言之方が年仕盛
書者出游若恐不暇燈収花雪頼帳然初日不
能忘を人則不終未嘗罷於中や
かくはとくをりてゆらん事ハ秋余を厭

替槌上之二卷者於益城郡原町邑
文政十年丁亥冬十一月十七日寫之

中村直衛

